

『正論』1976年2月号

●中国情報第二弾・江青外交演説のすごい全貌

この一年來、情勢の変化はきわめて大きく、事實は毛主席が六十年代初期におこなった「いまやまさに社会変革の偉大な時代のなかにある」という偉大な予見が完全に正しかったことを証明しています。主席が明確に「世界の矛盾の焦点はアジア・アフリカのあいだにある」と指摘しているのは、未来の革命の方向を指示しているばかりか、同時に革命の戦略的な問題をも明示しました。私たちは、主席の正しい路線の導きによってのみ、敢然とたたかい、包圍、封鎖、ペテンのおどかし、陰に陽にある攪乱、陰謀と破壊を恐れず、うまくたたかひ、融通性をもって、話し合いもできれば戦いもできるのであります。いつも二つの思想を準備するのであります。大動搖、大分裂、大改造の天下大乱のなかでは、革命の原則をめぐって、終始、敵と味方と友人をはっきり区別し、誰にたよるのか、誰と團結するのか、誰を分裂させるのか、誰を瓦解させるのか、誰を孤立させるのか、誰を打撃するのかを理解しなければならず、最大限に團結し、最大限に孤立させ打撃して、長期にわたって團結もし闘争もするという方針を堅持しさえすれば、私たちはきつと絶対不敗の地位に立つことができます。

レーニンの二段階革命論を堅持する

伝えるにすぎません。つまり上意を下達するのですが、やはり多くの問題があり、私自身の水準には限度がありますので、理解が正しくなかったり、ことによると誤っていたりするでしょうから、どうか批判して助けて下さい。

外交幹部への講話——常に学習をおこたらず、革命は銃口から生まれることを徹底せよ！

同志の皆さん、ただいま何人かの同志がいろいろの話をしましたが、いずれもきわめて重要な問題で、私たちの今後の外交工作に関係しています。外交のことには私は素人ですから、最初から学び、英語を学ぶときA、B、Cから始めるように、多くのことを皆さんから学ばねばなりません。外国人とのおつき合いは、「解放」前、南京、重慶、上海、北京のどこでもありましたが、

江青女史は、一九七五年三月中旬、北京市香山招待所に領事級以上の外交幹部を召集し、次のような概要の講話をおこなった。

中国情報第2弾

■秘密文書Ⅱ江青・講話

●江青外交演説のすごい全貌

■和戦両面に目的を合わせよ！
■編訳・中嶋嶺雄（東京外語大助教授）

今日のようにこんなに広範で、わが党の不可欠の事柄になり、しかも時には議事日程にのせて重視し、完遂しなければならぬということがあります。工作がうまくゆかないと、世界のすべてに影響がありますから、私たちは一挙一動、私たちのやっていることが全世界の広範な人民の利益に合致しているかどうかを考えざるを得ないのです。これらのことは、同志の皆さんがみな豊富な経験をもっています。私にはただ自分自身が毛主席に学んで得た若干の体得があるだけです。また主席は工作が大変忙しいので、私自身一人の黨員としての責任から、主席の言葉をお

マルクス主義、レーニン主義と毛沢東思想の魂および真髄は、階級闘争を堅持し、プロレタリアート独裁の学説を実行することにあります。革命の最終目的は、全世界的な範囲で共産主義社会を実現することにあります。革命の最終目標を実現するためには、どうしても革命をいくつかの段階に分けて進めなければならず、プロレタリア階級とその政党は、たんに連続革命の決意をくだすだけではなく、さらに革命の異なった段階によって、それぞれの異なった歴史的時期において、異なった政策と戦術を定めなければなりません。前者は目的で、後者は手段です。

この歴史的時期には、この時期の特徴に基づき、私たちが提起している「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求め」という論点の中心は、人民革命にあります。プロレタリ



演説する江青女史

ア階級の政権は、プロレタリア階級とその政党の指導のもとにおいてのみ打ち立てることができず、プロレタリア階級の形成と政党の建設および強大化は、国家の独立、民族の解放をかつとる民族民主の嵐のような大衆的革命運動のなかでなされなければなりません。私たちが国家の独立、民族の解放運動を支持し、貧困で立ち遅れた国を助け、彼らが帝国主義、植民地主義の政治支配、経済掠奪、文化侵略から抜け出すのを支持しているのは、このことが民族経済を發展させ、プロレタリア階級の隊伍を打ち立て、さらにすすんでこの偉大な階級を指導して、革命をすすめて政党を打ち立てるための必要な手段だからであります。これは革命の初期の段階であって、また必ず通らなければならない段階であります。

植民地主義の崩壊、帝国主義の瓦解は、社会主義革命の前触れであり、その前夜でもあります。貧困で立ち遅れた国は帝国主義、植民地主義の支配から抜け出して独立することはできても、その国自身が社会的に不合理な分配による貧富の不均衡からくる両極分化から抜け出すことはできず、そしてこのような分化はプロレタリア革命の火種をはらんでいるのです。民族経済の發展は、プロレタリア階級の隊伍を打ち立てる必要条件であり、小さな火花を燃え立たせる火種でもあります。国家の独立と民族経済の發展を離れて、社会主義革命の最後の勝利に到達することは考えられません。私たちが日和見主義と別であるのは、この問題においてであります。私たちは終始、マルクス・レーニン主義の連続革命論と革命の發展段階論を堅持しています。この問題から三つ

を引っ張り出し、社会のすべての妖怪変化を一掃し、プロレタリア階級の政権を強固にしましたし、国防力を増強しました。これと同時に、民族運動、民主運動の高まりによって、私たちも外交の重点を「黒い友人」、「小さな友人」、「貧しい友人」のうえに置き、彼らは私たちに感激して報いており、私たちは、「白い友人」、「大きな友人」、「金持ちの友人」はなくても、しかし私たちは決して孤立していません。私たちが国連にはいる問題の表決のとき、大国は大声で居丈高でしたが、いかんせん小さな友人の数が多く、声もはつきりしていて、最後には私たちはやはり国連にはいりましたし、ついで大国も門をたいて来訪しています。

キッシンジャーは、所詮「敗北主義」

数十年來、私たちはみな毛主席の「矛盾論」と「実践論」を学

鄧小平演説でしめくくり

●本誌独占の中国情報第三弾

発表以來、衝撃的な反響を巻き起こしている中国情報——喬冠華、江青両首脳の秘密演説につづく最終回は、現在周恩来総理の後継者として自他ともに許す鄧小平副総理の最近の演説から、特に重要な部分を抜粋して掲載・解説します。ご期待下さい。

の言葉（すなわち国家の独立、民族解放、人民革命）を理解し、私たちが当面、外交面で第三世界との関係を積極的に發展させることについては、道義的に彼らを支持し、経済的に彼らを援助しますが、彼らにたいしてはまさに毛主席がシアヌーク殿下に語ったように、「兵器がいるなら買うように。なければ送る。よろしい。だがただ一つの条件——それは革命である」のです。私たちは、民族解放運動を代償を求めずに支持していますが、これは私たちの社会制度が国際主義の義務を履行し、社会主義革命の全世界での勝利を促進するようわが国の外交政策を決定しているからであります。支援は従来から相互作用をもつものであり、私たちは民族独立をかちとろうとしている国を支援してきたのですが、逆にいうと、彼らの闘争も私たちを支援してきた、とこういことができます。南アフリカの人種差別に反対するゲリラ戦争、中東の覇権反対闘争、ラテン・アメリカの民族独立と民族解放闘争、東欧におけるソ連の支配から抜け出そうとする革命闘争、インドシナの解放闘争が、いまやすべて一つに結ばれています。東から西まで、南から北まで、帝国主義、社会帝国主義の首にかけられた繩はグッと引き締められています。アメリカ帝国主義、ソ連修正主義とその下僕は、手を抜いて私たちに立ち向かうわけにはゆかなくなっています。こうして私たちは平和な環境でわが国の工業、農業、国民経済全体の生産事業をすみやかに建設できるようになっているばかりか、同時に、私たちは政治戦線、思想戦線および文化戦線の社会主義革命をも順調に完成できるようになっています。劉少奇、林彪といった一握りのブルジョア階級の代理人

習していますが、周知のように、認識と実践は相互に依存していて矛盾の対立と統一はつねにあらゆる事物の内部に存在しています。

世界に矛盾がなければ、世界は歩みを止めて前進せず、「乱」は矛盾の激化で、「治」は矛盾の一時的な対立のなかでの統一です。「乱れてこれを治める」というように、乱れなければ治めようがないでしょう？ 世界が乱れないなら、反動階級は局面を維持することができ、残酷で貪欲飽くことなく労働人民を圧迫し搾取するのです。そしてプロレタリア階級も立ち上がることができず、プロレタリア階級の政党はまったく声も出せずに分裂させられ、瓦解させられ、買収され、利用されるか、もしくは変質させられ、滅亡させられてしまうのであり、これは反動階級の希望するところであって、私たちが見たくもありません。

ニクソンが訪中し、毛主席が彼に会ったとき、大部分の時間を哲学的な問題の論議に費やしました。キッシンジャーが周総理と何回も会ったときも、中国と世界の重要な事柄を話したほかに、哲学的な問題に話が及びました。彼らと私たちとの見方が異なっているのは奇怪なことではありません。キッシンジャーは会談の中で、アメリカはアジア、太平洋地域を放棄する意向のあることをもりましたが、この問題では、一が分かれて二となる見方をすべきです。私たちは、キッシンジャーは所詮、ブルジョア政治家の範疇を脱しきれないと考えています。彼の基本的な観点は、その擁護しようとする階級の利益に制限されています。従って、

彼は当面の国際的な新しい複雑な情勢のもとに出現した各種の矛盾を理解することもできなければ、解決することもできません。キッシンジャーは歴代の反動階級の政治家と同様に、冒險主義にしかすぎず、また敗北主義でしかないのです。

ニクソンとキッシンジャーは、アメリカのこれまでの政策、第二次世界大戦後に施行してきた力の政策が今日では通用せず、アメリカは現実の世界に立ち戻るべきで、ひきつづき他国の主権と利益に干渉して歩くべきでないことを認めています。キッシンジャー本人は、勢力均衡を保持する理論を提起しているのですが、こうして実際には矛盾を認めても積極的に闘争方式を探索して矛盾を新しい条件のもとで解決しようとはしないのです。反対に、回避的な態度でこの矛盾に対応しようとしており、実際にこれはやはり駝鳥のような政策です。矛盾を回避して矛盾の存在を隠蔽するのです。まさか今日の矛盾の存在が植民地や被占領地だけに限られた存在だということではないでしょうか？　そしてアメリカ自身も矛盾から逃避できるでしょうか？　しかし、他の一面からいえば、アメリカの退却と新旧植民地主義全体の崩壊は形勢の赴くところであり、一人や二人の政治家によって転換できるという希望はないのです。ですからプロレタリア階級とその政党は、このときにしっかりと時機をつかみ、たえず新旧植民地主義を暴露すると同時に、敵の内部の瓦解工作を含む統一戦線を堅持し、武装闘争を堅持し、銃口から政権が生まれるという偉大な真理を信じなければなりません。プロレタリアの政党指導下での広範な大衆運動の展開を堅持すれば、きつと弱国が強国を打ち負かし、小国

・ミン死後のベトナムはどうもダメだと認めています。この点について主席は一再ならずはつきり述べています。ベトナムの同志は革命的であり、彼らの苦衷は理解しなければならず、その人びとは革命的でないなどといってはならず、彼らは世界で最強と称されるアメリカ帝国主義に抵抗し、民族的犠牲を出し、その精神は感服すべきものであり、勝利後のことについては、事態の発展を見てから語るべきだ、というのです。

ラオスの情勢は大変よい。……インドシナ全体の形勢はすでに明るく、曙光はすでに眼前にあります。だがインドシナ三国が解決してはじめて万里の長征の第一歩が完遂するのです。世界は発展しており、革命は前進しており、工作はまだまだ多く、皆さんすべてが努力しなければならず、努力するのにもっとも重要なことはやはり自分が正しい路線を實行しているという自覚を高めることであって、こうしてはじめて情勢の需要と要求に追いつくことができるのです。

が大国を打ち負かすことができます。最後には政権をかちとり、社会主義革命の勝利をかちとるのです。

私たちはみな外交工作に携わっており、私たちは必ず全世界人民に革命の道理を宣伝し、同時にまた、私たちの態度を明確に表明しなければならず、革命でありさえすれば、私たちは必ずあくまでも支持します。中国人の話は筋が通っており、アメリカ帝国主義やソ連修正主義のように決して苦難を共にした友人を棄てたりはせず、決して自分の利益のために超大国と幕の陰で取引し、友人を売ったりはせず、ましてやペテンにかけたり、いいがかりをつけてだまされたり、陰謀で友人を利用したり、友人を死地に追いやりたり、本人が人に告げることのできないような利益をかすめとったりはしません。

毛主席はインドシナについての形勢を大変はつきり見通していましたが、南ベトナムが勝利し解放されたあとの形勢についても大変はつきり見通して、毛主席は「ベトナムは一つの寺に四人の住持がいて、鼠を施し、粥を施すのは施主である」といっています。主席はベトナム大使を通じて、ソン・ドク・タン、レ・ジュアン、ファン・バン・ドンおよびポー・グエン・ザップ、そしてさらにグエン・フー・ト、ファン・タン・ファトに告げるよう、主席はこういっています。「反帝であっても反修でなければ、最後にはもう一度、第二次革命をやらなければならぬ」。この点を彼らは理解できたかどうか？　なんともいいがたいのです。人はみなベトナムの話が出ると、総じて、ホー・チ

そこで今日は外交戦線の「批林批孔」運動にとくに触れてみましょう。第四期全国人民代表大会で採択された会議の公報は「全国人民はひきつづき『批林批孔』運動を普及し、深化させ、持続的におこない、マルクス主義で上部構造のすべての領域を占めなければならぬ」と指摘しています。

外交戦線はその負っている任務が他の戦線と異なっているために、一部の外交要員は比較的長期間を国外で工作しますから、国内の広範な人民と同様の要求ややり方はできず、その人が公然とニューヨークやパリの大通りへ駆けつけて外交部長の壁新聞を貼ったり、ましてや他人の内政に干渉はできず、外国の大統領や大臣に意見を突きつけたり、猛然とやつつけたりはできません。従って、具体的な状況を具体的に分析し、具体的に処理できるだけののです。以前の時期に外交部は「帰国して指示を仰ぎ、出国し

外交官も「学習」第一にせよ

釈迦とその弟子

価 一〇〇〇円
千 二〇〇円

五井昌久著

生命の永遠性を悟り、人間世界の老病死苦をこえた覚者、釈迦牟尼仏の生涯と、阿難を中心とした弟子たちの解脱から涅槃への道を描いた小説。

ひかり 白 光 真 宏 会 出 版 局
〒101 東京都千代田区外神田1-15-7
振替東京151348・電話 03(295)0456



青い鳥が長銀のシンボルです



長銀は 皆様と共に歩む 銀行です。

リッポーター
リッポーター
日本長期信用銀行
本店/東京都千代田区大手町1-2-4
〒100 ☎03(213)5111

てこれを広める」、「自分で学ぶことを主とし、お互いに師となる」、「近くには伝え、遠くには教え、巡回して指示を伝える」、「適当に集中し、広く交流する」などの方法をとって大変よい効果があがりました。今後はよくないところは改善し、よいところは堅持してゆくべきです。

今日はただいくつかの主要な問題について、皆さんに概要の説明をおこない、若干の要求を提出して、適当であるかどうか、皆さんで考えていただきたい。

一、党の一元化された指導をさらに一段と強化すること。
中国の昔に「将は外にあっては君命を受けず」という言葉がありますが、当然、将が外にあって君命を受けるとか受けないということも存在しますが、外交要員として国外にいるので、党の指導の一元化された軌道を弱めたり、そこから離れたりできるかどうか？ 当然いけません。ましてや今日は数百年以前と異なり、電報、電話、無線電信、宇宙通信がありますし、必要なときに飛行機に乗れば、わずかの時間で往来でき、便利このうえないのだから、どうしてこれを用いないのでしょうか？ だが私たちの同志のなかには、思想上このように考えない者が若干おり、彼らは工作の特殊性を強調して、その普遍性を否定するのです。

ある大使館、領事館、商務弁事処は、毎日毎日電報を打ち、二日ごとに通信があり電話がきますが、話はすべて業務ばかりです。党の幹部は業務に心酔し、外交をやり、商売をおこない、ブルジョア外交官や独占資本家よりも熱心です。政治学習や運動を

学習を強化し、経常的に報告するという四つのことを一緒にし、かりとつかみ、生き生きとつかみ、着実につかむのです。党組織の書記、その公館首長がこれからもつかもうとせず、責任を中央連絡部や中央宣伝部にゆだねて中央から人を派遣して代ってやらせるよう請訓し、要するに「外交では成績をあげているが、運動は遅れつぱなし」という現象は、即刻改めなければなりません。これを今年の外交戦線の第一の事柄としてつかむのです。

二、学習内容と運動のやり方。
中央は七二年二月にすでに具体的な規定をしましたが、四つのいけないこと、五つのしてよいこと、六つのしなければならぬこと、を堅持しなければなりません。ひっぱり出して闘争しては

やることはといえば、事は自分に関係ないというかのように棚上げしています。とくに東アフリカ、中央アフリカの若干の国の在外公館では、甚だしきは半年間も学習せず、一度も学習報告をせず、運動情況の報告もまったくないので、毛主席はかねてから、「多く請訓し、報告し、面倒がってほならず、必要ならたびたび北京へ帰ってきてよい」と強調されてきました。これはたんに工作上の連絡を指すのではなく、その主眼は私たちの外交要員に中央と連絡を保たせ、党の一元化された指導を強化し、広範な外交要員を全国の歩調にあわせ、国外でも同様に運動のなかに身を投じさせ、覚悟を高め、帝国主義に反対し、修正主義を防ぎ、名実ともに一個の赤い外交要員にするためなのです。

かつて一時期、私たちはアフリカ諸国の在外公館は開設以来の歴史も比較的長く、基礎もかなりしっかりしていましたので、重点をヨーロッパ・米州地域で新しく国交を樹立した国の公館の要員の指導と教育に置いています。いまみてみると、全面的にしっかりつかまなければならず、そうでないと、つかんでもつかまないので同じく縮まりがありません。つかむといっても誰がつかんでゆくのでしょうか？ それには党が運動にたいする一元化された指導を強化しなければならず、中央連絡部（中国共産党国際工作部ともいえる党中央対外連絡部のこと）記者、外交部がつかまなければならず、各大使が公館党組織の書記につかまなければならない、各層ごとにつかみ、徹底的につかまらせるのです。在外公館は国内の各戦線、各単位と同様に、書記が監督し、専従者が責任を負わなければなりません。計画を定め、指導グループをつくり、

いけない、免職してはいけない、大字報を貼り出してはいけない、連合して派閥組織をつくってはいけないのです。小字報を送ってよい、等級を越えて摘発状を書き帰国してよい、面と向かって首長に意見を提出してよい、相互に学習で得たものを連名で提議したり、等級を越えて報告してよいのです。重大問題の報告のためには帰国して報告することを要求してよいのですが、対外的には一致しなければならず、事にあたっては注意して調査しなければならず、指揮に服従しなければならず、全体の利益をかえりみなければならず、国家の尊厳をひきつづき擁護しなければならず、党の一元化された指導をひきつづき擁護しなければなりません。気ままに騒いで事を処理してはならず、大同を求めて、小異を残し、決してどんな場合でも「身内を傷つけ、敵を喜ばせる」とい

うことをしてはいけません。同時にまた特殊な環境のなかで一部の同志の工作上的状況や身分を理解してやらなければならず、大使が統一戦線の工作上、資本家の宴会に出席しても、ブルジョア階級に腐蝕されたとみることができません。あなたがたはみな反帝反修闘争の第一線に立っており、各種各様の人に接触しなければならず、革命的警戒心を高めなければならず、敵の糖衣砲弾と寝返り策動を警戒しなければなりません。白相国（前対外貿易部長であったが更迭された—訳者）は数十年の革命経歴をもち、アメリカや蒋介石の砲弾には倒れなかったのに美女に化けた毒蛇には耐えられなかったのですが、これは教訓となることです。もとより白相国にはこのほかにも問題があり、私たちが彼が改めることを望んでいますし、また彼がひきつづき工作できるように望んでいます、そのカギは彼自身にあります。

私たちが国外に派遣している大使などの責任者は、大多数がみな数十年の革命経歴をもっています。経験が豊富で、責任は重大であり、彼らは毛主席、周総理、朱委員長（朱徳・全国人民代表大會常務委員長—訳者）を代表し、中央を代表し、全国人民を代表して国外で帝国主義、修正主義、反動派とたたかい、世界の革命の人民とともに革命をやっているのです。彼らの功績が主要であり、欠点や誤りはひとたび指摘されれば改めることができますから、皆さんが意見を提出するには善意から出発しなければならず、人には認識の過程があることを認めなければなりません。この点はきわめて重要なことです。私たちの運動の最終目的は人を教育することであって人を肅清することではなく、この一点を明

速さでリード、中味がズシリ、読んだ人に差がつく

週刊サンデー

毎週金曜日発売

確にすべきです。陳楚（駐日大使—訳者）の報告は、皆さんもごらんになったでしょうが、この報告から皆さんは首長たちの革命の意気込みの強さをみてとることができ、彼がいつている次の言葉は大変立派です。「身を繁華な都市に置き、帝国主義、修正主義、反動派と顔をあわせていながら、私の胸には朝日が宿り、永遠に党とともにあります」

最後に学習班のことを話しますが、外交部と中央宣伝部がやった外交要員の学習班は、たいへん効果があり、いくつかの西ヨーロッパ駐在大使館も学習班をやりました。外交部門が学習班をやるのは、「批林批孔」運動をさらに前進させるのによいやり方であり、また、理論と実際を結び、運動と業務の両面を兼ねそなえるやり方でもあります。フランス大使館が提出した「忙しいときは自習を主とし、暇なときは集団学習をし、指導して定期的に総括し、補導して自習と相補うようにする」というこのやり方は、学習班のなかでさらに発揮されてしかるべきでしょう。

〈解説〉

密教としての中国外交

江青演説



なかじま ねみ お
中嶋 嶺雄
（東京外語大助教授）

党の一元化指導謳う

本誌一月号に訳出紹介した喬冠華演説については、去る十二月上旬のフォード米大統領の訪中中、その共同声明の出ない米中関係のきわめて重要な現段階的性格を知ろうえでも、多くの示唆に富むものがあつた。もとより、アメリカ國務省も、この喬冠華演説については十分な検討を加え、大統領の訪中に備えたはずであるが、一方で中国をとりまく国際環境を見てみると、南

ベトナム//ハノイ化//の急進展、ラオス情勢の最後の変化など、インドシナ半島をはじめ東南アジア全域に広がる「ソ連の影」に対応すべき中国外交の最近の出方が一段と注目されており、その意味でも、喬冠華演説はやはり重要な意味をもっている。われわれは、共産圏の外交、とくに中国外交を考えてゆく場合、『人民日報』や『紅旗』などにあらわれる公式見解、中国首脳の公開の演説や談話など、いわば顕教的なドキュメントとともに、非公開の密教

的なドキュメントを是非とも重視しなければならぬが、この点で最近の中国外交に關するもう一つの密教的テキストこそ、この江青講話なのである。

毛沢東夫人江青女史のこの講話は、七五年三月中旬に中国外交部（外務省）の領事級以上の幹部を集めて北京でおこなわれたのち、外交部の十八級以上の幹部に伝達されたものだといわれ、次いで中国共産党北京市委員会が三月十五日付で印刷して外交関係以外の幹部や党員の閲覧にも供したといわれている。

江青講話のテキストは、早くも去る五月下旬、台湾の情報誌に掲載され、香港の中立右派系誌『展望』（六月十六日号）をはじめ若干の誌紙に転載されて、わが国でも一部の資料に訳出された。いうまでもなく、欧米のジャーナリズムにもとりあげられたのである。もとより、江青講話が真実のものであることについては、私自身の中国研究の経験からしても、テキストを十分に読めば明らかである。かつて、林彪異変に際し、その反革命陰謀の書といわれた「八五七一工程」が同様のルートで外部世

界に伝えられたとき、「B52」(毛沢東を指す暗号)とか「江田島精神」とかの表現を中国共産党首脳が使うはずがないとの俗説が出て、その信憑性を疑う向きもあったが、「八五七一工程」については、周恩来総理自身が過般の全国人民代表大会の政治報告で公式に言及して、その真実(といっても、林彪異変の全貌が「八五七一工程」の「紀要」のとおりであったかどうかはおのずから別問題である)が、中国自身によって確認されたのであった。中国の新憲法草案の場合もほぼ同様である。

ところで、江青講話は、中国外交のキメ細かい手の内を示すものとして、同時に中国共産党と外交官との関係、在外公館と党組織との関係を知る手がかりとしてきわめて興味深いものである。この点でわが国の外交官にとっても必読の文献だといえようが、一方、七五年春の時点だといえ、従来、周恩来総理のもとにゆだねられていた外交部門に江青女史が党の一元化指導を強調する立場から参与しているという事実も注目に値する。江青講話を見るかぎり、外交部(中国外務省)は、党中央対外連絡部の

実務執行機関であるような印象を受けるが、このことも党の一元化指導のありようを示すものだといえよう。

牛長官、信用されず

内容的には、読者は本文を熟読されたいが、全編、中国外交の「革命外交」的精神と戦術に支えられている。そうしたなかでキッシンジャー論なども興味深いものであり、江青女史は、中国へ接近しようとしたアメリカの立場を評価しながらも「キッシンジャーは所詮ブルジョア政治家の範疇から脱しきれない」と述べている。

江青講話のもう一つの重要なポイントは、ハノイにたいする中国の態度を示唆していることである。この点について江青女史は、「反帝であっても、反修でなければ、最後にはもう一度、第二次革命をやらなければならない」という毛沢東の言葉を伝え、今日ベトナムの指導者がこの点をわかつているのかどうかは「なんともいいたくない」とさえいつている。同時に「ベトナムは一つのお寺に四人の住持がいて、帛を施し、粥を施すのは施主である」という毛

沢東の譬喩を伝えているのである。この譬喩の意味するものはなにか。原文は「越南是一個廟堂四個方丈、施帛施粥是施主」であり、なかなか意味のとりにくい一節なので、江青講話が伝えられたとき、台湾筋の出版物もその意味をまったく間違えて注釈していたが、さすが香港の「フリー・プレス」で健康をふるうすぐれたジャーナリスト、レオ・グッドシュタットは、中国筋の権威ある解説だとして、四人の住持(原文の「一個廟堂四個方丈」は「一つの寺に四人の住持へ住職」でも、「一つの寺に四つの方丈人住持の住む小堂」でも、どちらに訳してもよい)とは親中国派と目されるチュオン・チン国会常任委員会議長をのぞく北ベトナムの最高指導者たち、つまり、レ・ジュアン、ファン・バン・ドン、ソン・ドク・タン、ポー・グエンザップを指し、施主とはソ連のことで、右のとえはソ連の援助を物ほしげに受けている北ベトナムを毛沢東があてこすったのだという主旨の解説を紹介していた(「フリー・プレス」エコー・レビュー)一九七五年七月十一日号)。今日

の北京とハノイの関係に照らして、きわめて正鵠を射た見方であろう。(なお、今日の北京とハノイの関係については、さしあたり拙稿「インドシナをめぐる中ソ対立」、「国際問題」一九七五年十月号、参照)

最後に、江青講話は、これまで閉ざされた環境のなかにあった中国の外交官が、資本主義諸国の在外公館にあって、いかにして党の路線を貫くかについてきわめて具体的に指示している。その場合、各公館における党書記の果たすべき役割を強調し、「外交で成績をあげているが、運動は遅れつばなし」ということのないよう警告している。そのためには、外交要員は等級を超えて本国に問題を報告したりするいくつもの規定を守らねばならないとして、いわば

党中央の側からする外交官管理の秘訣を明らかにしている。しかしその場合でも対外的には一致団結しなければならず、大使がブルジョア資本家の宴席に招かれても、それは統一戦線工作のためなのだから、それだけでブルジョアの的に腐蝕したといつてはならないといましているのも興味深い。同時に、更迭された白相国・前対外貿易相が美女の誘惑に負けて問題を起こした例をとりあげ、外交要員は反帝反修闘争の第一線に立つのだから、いろいろの人と接触すべきだが、つねに革命的警戒心をもつべきだと強調し、駐日陳楚大使をたたえて、「身を繁華な都市に置き帝國主義、修正主義、反動派と顔をあわせていながら、私の胸には朝日が宿り、永遠に党とともにあり

ます」という同大使の言葉を引いている。大変印象的なくだりである。いづれにせよ、江青講話は政治家、外交官はもとより、広くわれわれ日本人の中国認識をよりリアルなものにしてゆくために是非読まれるべきものであり、わが国としては中国外交の二面性とその周到な対外接触の方法を十分に理解して対応すべきであろう。いわゆる中国外交の融通性(靈活性)は、革命のため、そして当面は対ソ戦略のための統一戦線工作的な性格のものであることを、この際われわれはもう一度再確認すべきであるのかもしれない。

一月号掲載の意見広告「北方領土問題対策本部」とあるのは「北方領土問題対策協会」の誤りでした。お詫びして訂正します。—— 広告部

釈迦とその弟子

五井昌久著

生命の永遠性を悟り、人間世界の老病死苦をこえた覚者、釈迦牟尼仏の生涯と、阿難を中心とした仏弟子たちの解脱から涅槃への道を描いた小説。

価 1000円
〒 200円

ひつこう 白光真宏会出版局
〒101 東京都千代田区神田1-15-7
振替東京151348・電話 03(295)0456

サンケイ オピニオン マンスリー

正論

昭和五十年八月十五日国鉄首都特別乗承認雑誌第三七
〇号昭和五十一年二月一日発行 毎月一日発行 通巻
第二十四号 昭和四十九年五月二日第三種郵便物認可

集中大研究・自民党の終末と新保守党宣言

2 新春号



特別寄稿／言葉狩りのすべてに答える／部落解放同盟
独占研究・新保守党綱領草案／政党政治研究会
中国情報第二弾・江青外交演説のすゝめ全貌／編訳・中嶋嶺雄